



TITLE:

「あっ!こんなところにあった」 --
意味構造と「過去」 --

AUTHOR(S):

山本, 雅子

CITATION:

山本, 雅子. 「あっ!こんなところにあった」 --意味構造と「過去」 --. 言語科学論集 1997, 3: 45-59

ISSUE DATE:

1997-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66938>

RIGHT:

「あっ！ こんなところにあつた」

— 意味構造 と「過去」 —

山 本 雅 子

京都大学

E-mail: bella@vega.aichi-u.ac.jp

1. はじめに

本稿では、「タ」の本質的意味を解明する研究の一環として、従来テンス概念では説明できないことから用法の列挙に留められていた「タ」が、予期していた事態の＜実現＞を認知する話者の意識に依拠することに着目し、「タ」の意味構造を明らかにする。さらに、その意味構造の作用から、従来では本質的意味とみなされることの多い「過去」の意味が、作用的意味^[1]の一つであることを説明する。

「タ」の本質的意味を解明しようとする研究姿勢は従来から見られるが、その主流は、根幹をテンス概念に据え、テンス概念では説明できない種々の振る舞いは特殊なものとして用法の列挙に留めてきている。しかし、一つの形式で表される形態素の意味を、主たるものとそうでないものとに分け、両者の連関性については何も考えを及ばせないという、このような研究姿勢ではいつまでたっても「タ」の統一的説明は果たせないだろう。統一的説明に収束するためには、従来、主たる意味であるといわれていたものが本当に主たる意味であるのか、という疑いをもち、例外視されてきた振る舞いに焦点を当て、そのような「タ」がいかんして産出されるかという問いに答えを出すこと、つまり、話者がどのように事態をとらえた際に「タ」で言い表すのか、という話者の心の動的システムを明らかにすることが必要である。その解答が見つけれられたときにはじめて「タ」の本質的意味の解明ができたといえるだろう。

では、心の動的システムを探究するにはどうすればいいのだろうか。言語をスタティックなものとして捉える従来の文法に対し、ダイナミックに捉える認知文法のパラダイムでは、「表層レベルに言語化される表現形式のちがいが、外部世界にたいする主体の把握の仕方、問題の状況にたいする解釈のモードのちがいを反映している」（山梨 1995）と解される。このような、主体の認知態度を焦点化する研究姿勢は心の動的システムを追求するものであり、「タ」の産出のメカニズムの説明を可能にするにちがいない。

以下では、テンス概念では説明できないさまざまな「タ」の振る舞いに、話者のどのような解釈モードが反映されているかを考えることにより、「タ」の意味構造を解明する。その後、その意味構造を DOMAIN との関係から捉え、「過去」が作用的意味の一つであることを説明する。

2. 「ある」と「あつた」

われわれは、何かを探していて見つけた時、「あっ！ こんなところにあつた」と言う場合もあれば、「あっ！ こんなところにある」と言う場合もある。つまり、同一の状況を「タ」

で言語化したり、「ル」で言語化したりしている。この状況をテンス概念¹⁵⁾で説明しようとすれば、〈探していた物が、目の前に存在している〉ことについての発話であることから、テンスは現在であり、「ル」のみが正しい使用となるはずである。しかし、現実のわれわれは「タ」も使用する。いや、こんな場合には「タ」を使用する傾向のほうが強いと言えそうである。こう考えると、この場合の「タ」と「ル」の使い分けはまさに話者の解釈モードの反映といえるだろう。そこで、ここでは、「こんなところにあった」の「タ」が話者のどのような解釈モードを反映しているかを考える。

2-1 内観

たとえば、次のような質問をされたら何と答えるだろうか。『ある人が鍵をさがしており、それを見つけた瞬間をビデオカメラで撮って再生してみた。ところが不手際から音声は録音されていない。そこで、この人の発話を推測してみたいと思う。「こんなところにある。」か、「こんなところにあった。」のどちらかにはちがいないのだが、ちょうど文末を発話しているところの口元の映像が不鮮明で、果たしてどちらか分からない。どちらが発話されていると思うか。』

映像が一種類ということは、外から見ると、話者を取り巻く外的状況は同一であるということになる。となれば、発話の違いは話者の心的態度の違いとみなしてよいだろう。発話者になったつもりで内観してみると、両者の違いは次のようになる。

一般に、目の前の状況を描写する場合、われわれが「ある」を用いることは日常のさまざまな例から容易に納得のいくものだろう。たとえば、化学の実験をしている教師は、目の前のピーカーを指して、「ここにピーカーが二個ある」と言うが、決して「二個あった」とは言わない。このような身近な例からも、「こんなところにある」は、探していたものが眼前に存在していることをたんに描写する表現と考えるのが妥当である。

一方、眼前にその物が存在しているにもかかわらず、何かを探していて見つけた場合は、「あった」を使用することが多い。これは何故だろうか。日常生活のなかで、われわれが何かを探していて見つけた時の心的状況は、一見、思いがけない発見であるかのように思う。しかし、さらに内観してみれば、何かを探す場合、われわれは、その対象が必ず「[在るコ]」を予期していたことに気づくだろう¹⁶⁾。となれば、見つけた瞬間の話者の心境は、予期していた「[在るコ]」が目の前の事態として「<実現>した、というものである。

鍵が無いことに気づいた話者は、気づくと同時にどこに在るだろうか、と考える。つまり、鍵が「[在るコ]」を予期するのである。そこで、その「[在るコ]」を「<実現>させるために探すという行為を採る。さあ、出かけようとしたのにいつもあるはずの場所に鍵が無い。昨日履いていたズボンのポケットのなかだろうか、と鍵の「[在るコ]」が予期される場所を探す。しかし、「[在るコ]」は「<実現>しない。それではと、次に「[在るコ]」が予期されるカバンの中を探す。しかし、無い。そこで、「[在るコ]」が予期される場所をいろいろ思いめぐらし、探す。そして、ついに鍵を見つける。思わず、「あった!」と叫ぶ。探していた鍵の「[在るコ]」が「<実現>したことを認知した話者は、<実現>の認知を「あった」の「タ」で言語化しているのである。

したがって、ビデオに映った話者の心的態度の違いは次のように説明できる。見つけた瞬間に、無いと気づいたときから予期していた「[在るコ]」が「<実現>した、と意識すれば「あった」という発話になる。一方、探している以上、「[在るコ]」の予期の意識はあったにちがいないが、実際に探し当ててみると、その場所があまりにも思いがけないところであった場合など、たんにそこにその物が在ることにしか意識ののぼらないこともある。そんな場合に

プロフィール、その前提となる認知領域をベースと名付け、「弧」の概念だけではなく、広く、言語の意味構造はベースとプロフィールの相互関係で成り立つとしている。言語の意味を《際立ち》として捉える、というこのような考え方は、(図2)に示した予期と実現の相互関係の説明に大いに役立つものである。

(図3)では、認知領域・《際立ち》の関係が全体・部分の関係として表れているが、これはここで示されている例がTHINGであることによるものである。目で見たり、実体に触れたりできるものをTHINGと考えるならば、どのようなTHINGであれ、われわれがそれを認知する場合、認知領域である全体の一部分が際立ったもの、として認知していることは、日常を省みれば納得のいくものだろう。しかし、一方、(図2)を説明する、つまり、「タ」を説明しようとするときEVENTについて考えることになる。では、EVENTが《際立ち》を見せるとはどういうことだろうか。

EVENTを認知する際に、認知領域と《際立ち》の関係が、THINGのように、すべて全体・部分の関係で捉えられるとはとてもいえない。となれば、THINGとEVENTとを顕著に区別するものが何であるかを考える必要があるだろう。THINGとEVENTとを対照させた場合の決定的な異なりは、時間要素の有無にある。EVENTについて述べようとする、かならず時間が拘わることから分かるように、時間要素は、EVENTをEVENTたらしめる不可欠な要素である。

では、時間要素は《際立ち》とどう関係するのだろうか。時間要素とEVENTの関係については、ライヘンバッハ(1986)を引用して山本(1996:16)で説明したように、時間要素が付加されたEVENTは<実現>の意味を持つ。つまり、時間要素をφとするEVENTは概念としてのEVENT(以下[EVENT、コ]と表記)であるが、そのEVENTは、時間要素が付加されるや否や<実現>の様相を呈するのである。では、<実現>は《際立ち》といえるのだろうか。

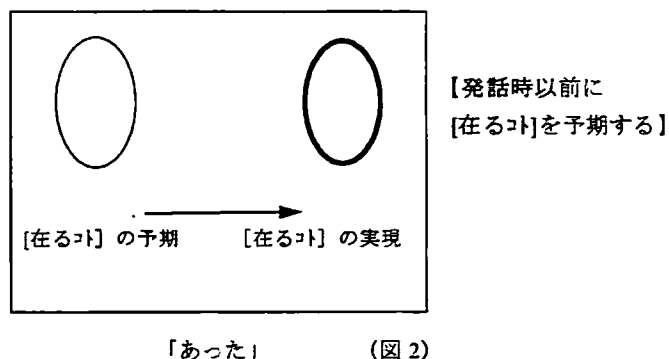
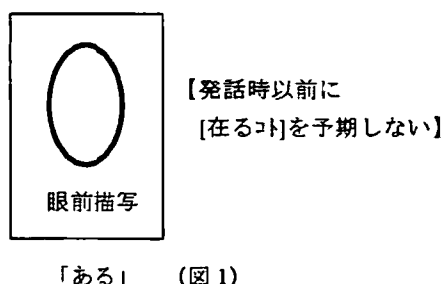
日常生活のなかでの発話を想定しよう。例えば、「ケニアへ行く」というEVENTを比較した場合、[ケニアへ行くコ]という概念をそのまま提示した①「来年、ケニアへ行くつもりだ。」と、[ケニアへ行くコ]という概念を<実現>の様相として提示した②「去年、ケニアへ行った。」とでは、どちらからより鮮明なイメージを受けるだろうか。おそらく、②の方が①よりもはるかに鮮明なイメージとなるにちがいない。この鮮明さはEVENTが《際立ち》を帯びた際の効果⁽¹⁵⁾である。この効果を発揮させているのが<実現>という《際立ち》である。

《際立ち》を帯びるということは、それを際立たせる背景となるものがなければならない。つまり、そこでは〈図〉と〈地〉の関係が成立しているはずである。となれば、その〈地〉の役割を担っているのは<概念としてのEVENT>である。〈地〉は〈図〉にくらべれば消極的な要素であるが、それは〈図〉を際立たせるだけでなく、〈図〉の意味を限定し、具体化する基盤である。<概念としてのEVENT>がその基盤となっているのである。

このように考えてみると、さきにTHINGでは全体・部分の関係として表れていた認知領域と《際立ち》の関係(図3)が、EVENTでは概念としてのEVENTと<実現>という意味を持ったEVENTという関係で表されることが分かる。すなわち、《際立ち》の具体的意味が<実現>である。このことから、EVENTの意味構造は(図4)のようになる。(図4)を用いて「あった」の「タ」を発話する話者の心的操作を説明すると次のようになる。『「まず、心の内に時間要素が付加されない[在るコ]というEVENT概念がベース(E₀)として立ち上がる。それに時間要素が付加されると<実現>という際立ちを帯びたプロフィール(E₁)となる」というベースとプロフィールの関係を、話者が認知する』というものである。

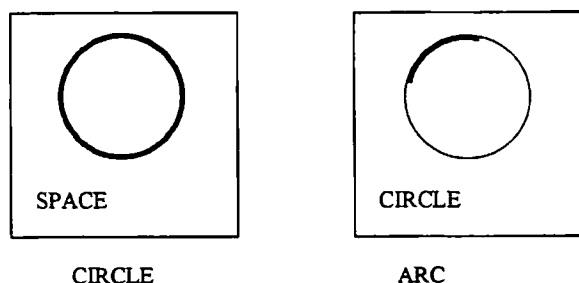
は、[在るコ]の予期の意識は消えており、話者には目の前に物が存在していることだけが意識化される。その場合には眼前の状況描写である「ある」の発話となる。多くの場合われわれがものを探する場合の心境は前者のようなものだろう。そのため、「あった」という発話のほうが一般的になっているのである。

さて、このように考えてくると、「ある」と「あった」の違いは、発話時以前に話者の心のなかに、在るにちがいないという[在るコ]を予期する意識があったか、なかったかに依ることになる。図で示すと次のようになる。



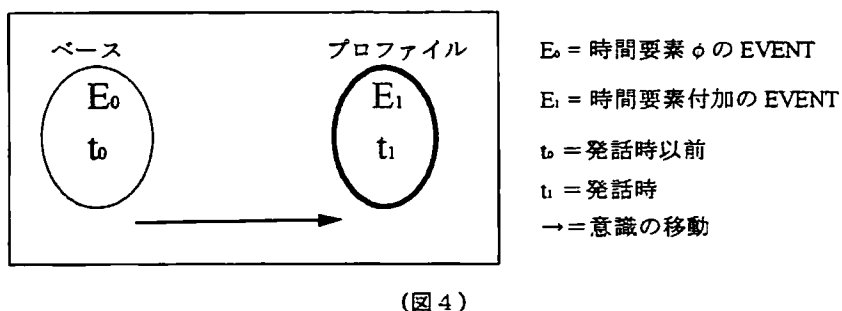
2-2 「タ」の意味構造

Langacker(1987)では、われわれがことばの意味を理解する際、必ずそのことばをある認知領域に照らし合わせて理解することが「弧(arc)」の概念を用いて説明されている(図3)。



(図3) Langacker(1987):184

「弧」を理解する場合、われわれは「円」を認知領域とし、その一部分に焦点を当てて前景化することにより、その部分が「弧」とであると認知する。上図では、「弧」の部分が太線で表されているが、Langacker(1987)はこのように特別な《際立ち》が与えられる部分を



ところで、これまでは「あった」の「タ」に限って述べてきたが、(図4)は「あった」のみならず、さまざまな「タ」の振る舞いを説明する意味構造である。次の節では(図4)の有効性を例証する。

3. ベース・プロフィール と 言語化

ベースとプロフィールの関係を成す EVENT 間には、媒介変数とでもいうべき以下の四種類の関係が介在している。

1. $E_0 = E_1$
2. $E_0 \neq E_1$
3. $E_0 \Rightarrow E_1$
4. $E_0 \boxed{E_1}$

以下では実際の発話の際に、それらがどのように関係し合い、どのように言語化されているか、という「タ」の意味構造の作動の実際をみる。次にそのようにして表出された「タ」が表す作用的意味について考える。以下では次のように表記する(「あった」の例で示す)。

(ベース) : [EVENT]	→	(E_{0t_0}) : [在るコ]
(プロフィール) : [EVENT]	→	(E_{1t_1}) : <実現>[在るコ]
表現	→	「あった」

① $E_0 = E_1$ (E_0 と E_1 が同一 EVENT)

(1) E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 を EVENT として言語化することによって表現する。

【例1】 貴之「アッ、アッ、生まれます！生まれます！ぼくの、ぼくの子供です」

貴之、カメラをバンして壁の時計を撮る。

貴之「四時六分。生命の誕生です」

貴之、再び玲子を写す。そして、産声。

貴之「生まれた！」

(「お日柄」: 69)

(E_{0t_0}) : [生まれるコ]
(E_{1t_1}) : <実現>[生まれるコ]
表現 : 「生まれた！」

貴之の心内にある (E_{0t_0}) : [生まれるコ]が、カメラを上下、左右に動かしているうちに目の前の事態として<実現>する。(E_{0t_0}) : [生まれるコ]が (E_{1t_1}) : <実現>[生まれるコ]になるのを認知した貴之が、その心的動作を思わず言語化したのが「生まれた！」である。

- (2) E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 に対するコメントとして表現する。

【例 2】ハイヤーの中。和夫と佳菜子が乗っている。

佳菜子「やっぱり電車の方が良かったわねえ」

運転手「日曜日の夕方でございますからねえ」

佳菜子「こんな事だろうと思った」

(「お日柄」: 56)

(E_{0b}): [渋滞に巻き込まれるコ]

(E_{1b}): <実現>[渋滞に巻き込まれるコ]

表現: 「こんな事だろうと思った」

渋滞に巻き込まれたことを、[日曜の夕方は、ハイヤーで帰宅すると渋滞に巻き込まれるコ]という心内の (E_{0b}) の<実現>であると解釈する佳菜子にとって、(E_{1b}): <実現>[渋滞に巻き込まれるコ]は自分の予測通りである。予測の正しかったことをコメントとして「こんな事だろうと思った」と言語化する。

② $E_0 \neq E_1$ (E_0 と E_1 が異なった EVENT)

- (1) E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 を EVENT として言語化することによって表現する。

【例 4】ふと自分の手の平を見る。鉄棒で出来たマメがなくなっている。

たかし「あっ、マメ消えちゃった。(つぶやく)」

(「夏時間」: 52)

(E_{0b}): [在るコ]

(E_{1b}): <実現>[消えるコ]

表現: 「消えちゃった」

きのうは手の平に[マメがあるコ]を確認していたたかしの心内では、[マメがあるコ]が当然の (E_{0b}) として立ち上がる。しかし、今、実際に手の平を見てみると (E_{0b}) とは反対の意味を持つ「消える」という事態が (E_{1b}) で<実現>する。たかしは残念な思いを言語化する「ちゃっ」を付加しながら、(E_{0b}) とは反対の意味を持つ事態の<実現>を言語化する。

- (2) E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 に対するコメントとして表現する。

【例 5】舞は熊田寅吉 (中小企業の社長風) とレッスンを始めた。無表情にブルースを踊る舞を呆気にとられて見ている杉山。しかし、がっかりしたのは杉山だけではなかった。服部もただボカンと舞を見、改めてフロアに立つたま子をみてがっかりした。

たま子「田村たま子です。おばあちゃん A ががっかりした?」

思わずうなずき、慌てて否定するように口を開く服部。

服部「いや、とんでもない。B 優しそうでほっとしました」

(Shall we: 14)

A (E_{0a}): [先生が若く美しい舞であるコ]

(E_{1a}): <実現>[先生が若くも美しくもないたま子であるコ]

表現: 「がっかりした」

B (E_{0b}): [先生がこわい人であるかもしれないコ]

(E_{1b}): <実現>[先生が優しい人であるコ]

表現: 「優しそうでほっとしました」

[自分の先生は若く美しい舞であるコ] を (E_{0a}) とした服部が実際に目にした先生は、若くも、美しくもないたま子だった。プラスの意味を持っていた (E_{0a}) がマイナスの意味で<実現>したことに対し、がっかりする服部。服部のその心的動きを察知したたま子は、服部に代わって ((E_{0a}) \neq (E_{1a})) の心的動作を (E_{1a}) に対する心情として言語化し、それを服部に差し出す。心の中を見透かされたと感じた服部は自分の真の心的動作を隠そうと、巧みな言語化を試みる。それは、目の前のたま子の優しそうな印象から導き出されたものであり、(E_{0b}) は[自分の先生はこわい人かもしれないコ]であったのに、それが優しそうなたま子という形で<実現>した、ということを相手に伝えようとするものである。

③ $E_0 \Rightarrow E_1$ (E_0 では予期できなかった EVENT が E_1 となる)

E_0 は、[何かが起こるコ、何かが存在するコ]というような内容が不明瞭なものである。しかし、不明瞭であることは EVENT が ϕ であることを意味しない。[起こるコ、存在するコ]ということに関しては、話者は確信を持っている。

(1) E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 を EVENT として言語化することによって表現する。

【例5】パンと牛乳を食べている落合と前田。二人の目の前を猛スピードで走り去ってゆく沢木。慌ててエンジンをかける落合。無線機を手に叫ぶ前田。
前田「郵便屋が動きました！」 (「ポスト」: 326)

(E_{0a}): [郵便屋が行動を起こすコ]
(E_{1a}): <実現>[郵便屋が行動を起こすコ]
表現: 「郵便屋が動きました！」

[郵便屋がなんらかの行動を起こすコ]という (E_{0a}) を心内に持った刑事の前田であるが、行動の内容は推測できず、見張っている。そんな前田が「猛スピードで走り去ってゆく沢木」を見て E_0 の <実現> を認知する。 E_1 の EVENT の言語化が「動きました」となる。

(2) E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 に対するコメントとして表現する。

【例6】舞の予想どおり音楽も聞こえない程緊張していた杉山を導くように豊子がうまくリードした。
舞「フォールアウエイ・リバーズ、テレスボン！スローアウエイ・オーバスウェイ」
そこまで見事に決めた杉山と豊子。
舞「やった！」 (「Shall we ダンス？」: 38)

(E_{0a}): [?]
(E_{1a}): <実現>[見事にきめるコ]
表現: 「やった！」

まだ習い始めて間も無い杉山がこんな大きな大会でうまく踊れるかどうか、教師の舞としては心配でしかたがない。[突然音楽に乗れなくなるコ][足がもつれて転んでしまうコ][よろよろしながらなんとかステップだけこなすコ][人並みに踊るコ][見事に踊るコ]などなど、何が起きるか分からない。が、何かが起きることは確かである。(E_{0a}): [何かが起きるコ]が、[見事にきめるコ]という E_1 で <実現> する。(E_{1a}): <実現>[見事にきめるコ] に対するコメントが「やった！」で言語化されている。

④ E_0 E_1 ((E_{0a})が背景化)

E_0 との関係から E_1 を言語化していることにちがいはないのだが、このケースには、発話の場において E_0 があまりにも当然のことであるため、話者が E_0 を全く感知しないという特徴がある。われわれの日常生活では、至極当然なことはいちいち意識されないものである。しかし、意識はされないものの、その当然なことは意識のなかに確かに存在している。つまり、意識のうえでは全く背景化されているのである。

本来、(E_{1a}) と (E_{0a}) のあいだには前景・背景の関係が成立しているが、このケースでは E_0 の背景化が一層強められる。言語資料をみると、このケースでは感覚表現が言語化されることが圧倒的に多い。これは、われわれの日常で最も当然なことといえば、自分が今、ココに在るという自己の存在であるが、同程度に、非異常時の自己の身体状況を、われわれが至極当然のことと理解していることによるものである。

(1) 感覚表現: 前意識⁽¹⁵⁾ のうちに感知している E_0 が E_1 となったことの認知を、 E_1 を

EVENTとして言語化することによって表現する。

【例7】 辰夫、入ってきて、
辰夫「ビールくれ。喉乾いちやった」

(「居酒屋」241)

(E₀) : [喉が乾いていないコ]

(E₁) : <実現> [喉が乾くコ]

表現 : 「喉乾いちやった」

(E₁) : <実現> [喉が乾くコ] を意識した辰夫が、乾きをいやそうとビールを注文している場面の発話である。辰夫が意識しているのは (E₁) : <実現> [喉が乾くコ] だけであるが、この (E₁) の背景には (E₀) : [喉が乾いていないコ] が当然のこととして存在している。人間にとってあまりにも当然の身体状況であるため、(E₀) に対する意識は、辰夫には全くない。(E₀) が背景化されることにより、(E₁) : <実現> [喉が乾くコ] が取り立てて前景化される。

(2)非感覚表現 : その場でのだれにも周知の EVENT である E₀ が E₁ となったことの認知を、E₁ を EVENT として言語化することによって表現する。

【例9】そこへ佐久間入ってくる。
佐久間「おや、こりゃいっぱいかな？」
壮太郎「あ、えーと……」
魚春「ここ、空きました」
佐久間「あ、こりゃ、あいすみません。私が追い立てちゃったみたいで」

(「居酒屋」245)

(E₀) : [空くコ]

(E₁) : <実現> [空くコ]

表現 : 「空きました」

(1)では、このケースにおける言語化が感覚表現に多いことを述べたが、だからといって、感覚表現以外がないわけではない。E₀ が発話の場において周知の事実である場合はどんな場合にも適応する。この例では、席があいていないことは、その場にいわせた誰にも周知の事実である。だれもが席が空いていないことを知っているが、かといって席を空けようという人はいない。心優しい魚春が、(E₁) : <実現> [空くコ] の EVENT を言語化させることにより、周知の事実が変化したことをみんなに伝えている。

4. DOMAIN

「タ」の意味機能について考えると、最も大きな問題は、「タ」が過去というテンス概念を表示することもあれば、とても過去を表しているとは思えない振る舞いも多々ある、ということである。前節では後者と思われる例をいくつか採り上げてベース・プロファイルの関係から説明したが、そこで挙げた例のなかにも、また、本稿では採り上げてはいないが、過去以外の意味を表していると思われる例文のなかにも、考えようによっては過去ともいえるのではないかと、と思われるものもいくつかある。このような、見方によっては過去を表しているようにも、表していないようにも見える、ということが何を意味するかをここでは考えてみる。

となると、まず考えなければならないことは、過去とは何かということになる。日常生活でわれわれが持っている、過去、現在、未来の概念は、発話時点、すなわち、話者の今、ココを基準時点とし、現実の時の流れのなかでの事態の占める位置を示すものである。このような経験的観点からの概念把握をそのまま生かすとすれば、われわれがテンスを考える際の

EVENT は、「話者にとっての現実の時空間」という DOMAIN(領域)のなかに据え置かれていなければならないことになる。しかし、さまざまな「タ」の振る舞いを観察してみると、EVENT が据え置かれているのは「話者にとっての現実の時空間」ばかりではないことが分かる。以下では、 E_i が<実現>するさまざまな DOMAIN を例を挙げて説明する。

① 現実世界

(1) 話者の目の前で E_i が<実現>する。

【例1】が該当する。 (E_{ib}) : [生まれるコ] が (E_{it}) : <実現>[生まれるコ]になる確信を持ちながらカメラを回している貴之は、 (E_{it}) : <実現>[生まれるコ]を目の前で生起した EVENT として認識する。EVENT が貴之の現実世界に据え置かれている。

(2) 話者の目の前で E_i が<実現>することを聞き手に要求

【例10】「さあ、どいた！どいた！」

(作例)

(E_{ib}) : [どくコ]
 (E_{it}) : <実現>[どくコ]
 表現 : 「どいた！どいた！」

「さあ、どけ！どけ！」という命令形で表現される命令では、話者が E_i の<実現>を認知するのは、聞き手がその行為を<実現>させた後のことであり、実際に<実現>させるか否かは聞き手の判断に委ねられている。しかし、「…た」で表現される命令は、話者が、<実現>を認知したものとして相手に投げつけ、相手にも<実現>を認知することを要求する、という順序になっているため、相手の意向を無視することになる。このような話者本位の要求はコミュニケーション上望ましいものではないことから、日常での表出頻度は極めて少ない。実際の会話の場では相手との関係を配慮して依頼などの表現に変わる場合が多い。

② 記憶世界

【例11】「あんた達何か武器持ってきた？」

「武器？いや」(略)

「(1)たしかトランクにボールがあったな」

三人、外へ出る。トランクを開ける。

「(2)ア、ゴルフのクラブがあった」

(「町」: 85)

(E_{ib}) : [あるコ]
 (E_{it}) : <実現>[あるコ]
 表現 : 「あった」

(1)「タ」の意味は、 (E_{ib}) : [あるコ]を予期した話者が、 (E_{it}) : <実現>[あるコ]を求めてありそうな場所をいろいろ想定し、探す。その結果、 (E_{it}) : <実現>[あるコ]を認知する。というプロセスであるが、こう書くと、このパターンは冒頭の例と全く同じに見えるかもしれない。しかし、この例には冒頭例との決定的なちがひがある。それは、<実現>する場のちがひである。冒頭の例では、毎日使う鍵が探した結果、目の前に出てきた、というものであり、EVENT が話者の目の前、つまり現実世界で<実現>する。一方、この例では、話者は記憶のなかをさがし、記憶のなかに (E_{it}) : <実現>[あるコ]を認知する。つまり、EVENT は話者の記憶世界で<実現>するのである。その言語化が①である。

しかし、記憶の世界では (E_{it}) : <実現>[あるコ]となったものの、果たして現実世界でボールがあるかどうかは定かではない。そこで、外へ出る。トランクを開ける。すると、そこにはボールではなく、ゴルフのクラブがある。しかし、これらはどちらも武器としてはたらくものであり、話者にとっては (E_{it}) : <実現>[あるコ]である。現実世界での (E_{it}) の認

知の言語化が(2)となる。

③ 思考世界

【例 12】「会いたいのだ」と島尾は低い声で言った。「え？」「会って話したいことがある。今夜、ぜひ来てほしい」「(1) はあ……。でも……」頼む。何も君に危害は加えん。約束する。」

そう言われても、誰だって最初から「危害を加える」と言うはずがない。「な、何のお話ですか？」伸子はまだいささか気が転倒していた。「君にぜひとも話しておきたいことがあるのだ。私を信じて来てくれんか、頼む」尾島の口調は、真実味を帯びているように、伸子には聞こえた。(略)それに、人間というものを根本的には信頼している所があるのだ。(略)人を騙すよりは騙されよう、という美德が、伸子の中には生きていのである。「(1)分かりました」と伸子は言った。

(『女社長に乾杯(下)』: 16)

(Estb) : [どちらかを決定する理由のあるコ]

(Eitb) : <実現>[了解する理由のあるコ]

表現 : 「分かりました」

「(1)分かりました」は「(1) はあ……。でも……」という、ためらいの言語化に呼応した発話となっている。ためらいという情動を覚える時の話者の心的状況は、その行為をするか、しないかの二者択一が即座にはできず、(Estb) [どちらかを決定するのに納得のいく理由があるコ]の<実現>を求めるものであり、狭い意味での (Estb) ⇒ (Eitb) の関係にある。

「会いたいのだ」という申し出を耳にした伸子は、了解したものか、拒否したものか即決できない。どちらかを選ぼうとする伸子の心には (Estb) [どちらかを決定するのに納得のいく理由があるコ]がある。

「尾島の口調は、真実味を帯びている」「人間というものを根本的に信頼している」というように、信子の意識は相手を審査したり、自己の価値観に問いかけたりして、だんだんと会うことを[了解する理由のあるコ]のほうへと近づいていく。そして、ついに (Eitb) : <実現>[了解する理由のあるコ]に思い当たる。その言語化が「分かった」となる。(Eitb) : <実現>[了解する理由のあるコ]の言語化であるのだから、「了解する理由があった」とでも言語化すべきである。しかし、このような対話の場での言語化は相手に向けた発話となる。この例では、了解したことを伝えるための表現が聞き手めあての丁寧さを伴って「(1)分かりました。」となっている。

④ 感覚世界

(Estb) が背景化された場合、(Eitb) の言語化は感覚表現が多いことを前に述べたが、感覚表現があるということは、同時に EVENT が感覚世界で<実現>していることも意味しているとも理解できる。【例 7】では「喉が渇く」という身体感覚であるが、他にもさまざまな感覚世界での<実現>がある。一例を挙げる。

【例 13】ゆみ子「(その手の向こうにひろがる光に目を奪われ) エエ陽気になりましたね」

喜大 「エエ陽気になったなあ………」

(「幻の光」: 135)

(Estb) : [春になると春を感じさせる感覚的 EVENTS が存在するコ]

(Eitb) : <実現>[春を感じさせる感覚的 EVENTS が存在するコ]

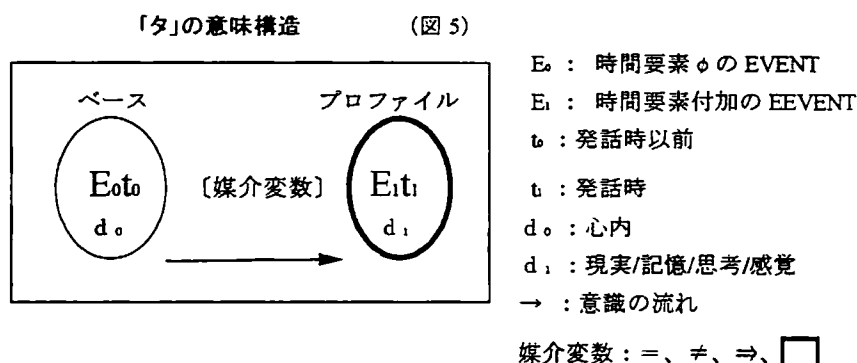
表現 : 「エエ陽気になりました」

大人になるまで生きてきた二人だから、自然界の常である E₀ を知らないはずはない。しかし、[春になると春を感じさせる感覚的 EVENTS が存在するコ]という E₀ はあまりにも当たり前のことであり、二人の意識にはのぼらない。背景化された E₀ が、早春らしい光のひ

ろがり、外気の暖かさ、風の心地よさ、花の香りなど、 E_i に該当するさまざまな EVENT で<実現>していることを感知した二人は、 E_i に対するコメントを言語化している。

⑤ まとめ

以上見てきたように、われわれが「タ」で表そうとする E_i は、現実世界、記憶世界、思考世界、感覚世界という四種類の DOMAIN を棲み分けている。これを(図4)に書き加えると次のようになる(図5)。



5. 作用的意味

「タ」の意味構造は(図5)で示したとおり、(E_0t_0)と(E_1t_1)の関係において(E_1t_1)の<実現>を際立ちとして認知するものであり、本質的意味は、その意味構造から産出される<実現>を認知した意識の表示であることはこれまでに説明したとおりである。そして、実際に発話された「タ」には、<実現>に、 E_0 と E_1 の相互関係、および、DOMAINとの関係、というそれぞれから関係特有の意味が付加される。これは、本質的意味と比すれば一レベル表層的な意味である。このレベルの意味を作用的意味と名付け、ここでは、それぞれの関係がどのような作用的意味をもたらすかを説明する。なお、以下では《 》内に作用的意味を表示する。

5-1 E_0 と E_1 の相互関係

① $E_0 = E_1$ 《満足、不満》

基本的には、話者が「こうなるのではないかと」予期していたことが、予期どおりの EVENT となって実現するものであるため、まず、話者は予期が<実現>したとを感じる。予期には、こうあって欲しいというプラス指向と、こうなっては困るというマイナス指向とがあるため、前者(【例1】該当)からは話者の《満足感》、後者(【例2】該当)からは《不満感》が伝わる。

② $E_0 \neq E_1$ 《落胆、安心、意外》

話者が、「こうなるのではないかと」と E_0 で予期していたことが、予期と違って E_1 で<実現>するものである。 E_0 がプラス指向であったのに E_1 がマイナスとなった場合は、《落胆》(【例6】該当)、 E_0 がマイナス指向であるのに E_1 がプラスになった場合には、マイナスに

ならなかったわけだから、《安心》となる(例えば、「ああ、よかった」)。また、E₀と全く異なった E_i の場合には、予期していないことが起こったことになるため《意外》([例 5] 該当)となる。

③ E₀ → E_i 《発見、報告、驚き、評価》

何かが起こることは分かっているのだが、予期できないことが実現するのであるため、認知した話者にとっては、E_i はまずは《発見》であり、それを他者に知らせるとなれば、《報告》となる([例 5] 該当)。

われわれが何かを発見してコメントをする場合、その EVENT と自己との間になんかの感情も挟まなければ、それは《驚き》となる。しかし、ego である人間は、多くの場合、EVENT に対し、自己との関わりからプラスかマイナスの感情を持つものである。そんな人間の習性から、発見に対するコメントは《評価》となりやすい。([例 6] は《驚き》にも《評価》にも該当する)

④ E₀ E_i 《実感》

(E₀)が背景化されることにより(E_i)が一層際立ちを見せるというメカニズムから、(E_i)が言語化された表現は焦点化される。この焦点化が感覚表現で言語化されると、《実感》が伴っている印象を与える。([例 7] 該当)

5-2 DOMAINとの関係

① 現実世界:《過去》

発話時に、「話者が自己の立脚時点を強く意識する」という条件が備わると、話者がその EVENT を「過去」の_コと認識しているという意識が反映されることになる。

例えば、「あれからどこへ行った?」という表現では、話者の今、ココより以前である「あれから」が言語化されている。「あれから」が言語化されることにより、話者の今、ココが指定され、発話時の「話者が自己の立脚時点を強く意識する」という条件が満たされることになる。そのため、「行った?」には「過去」意識が反映されていることになる。一方、[例 1] の場合、目の前の EVENT に全く気を奪われている貴之には、自分のことなど意識にあるわけもなく、この条件は備わっていないにちがいない。そのため、「生まれた!」には、EVENT を過去として把握する意識は反映されていないように印象づけられる。

つまり、現実世界を DOMAIN とする EVENT は、話者が自己の立脚時点を強く意識すれば「過去」、意識しなければ、本質的意味である<実現>のみが意味を持つという二面性を意味表示するのである。これが、本節の冒頭で述べた、過去のように見えたり、見えなかったりする所以である。このような意味の二面性は、EVENT が現実世界に据えられたとき以外では生じない。

② 記憶世界:《回想》

Bartlett(1932)は、人は外界がどのようになっているかにかかわる内的なスキーマを持っており、思い出すときにはこうしたスキーマが検索の手助けとして働く、といっている。[例 11] の(1)は、塚本が自己の内的スキーマを検索し、その検索の結果、[在る_コ]がスキーマのなかで<実現>していることに気付いた発話である。(1)「たしか……あったな」は Bartlett のいう思い出すという行為を表現したものであり、回想の意味を持つ。

③ 思考世界:《納得》《確信》《確認》

思考するということは、その結果として、それまで判明しなかったことが判明することを期待するものである。したがって、思考世界で、予期した EVENT が＜実現＞するということは、思考の到達点を示すものであり、EVENT の判明は、話者にとっての確信となる。電話の会話などで頻繁に用いられる「分かった」はこれに該当する。

④ 感覚世界:《変化の結果の焦点化》

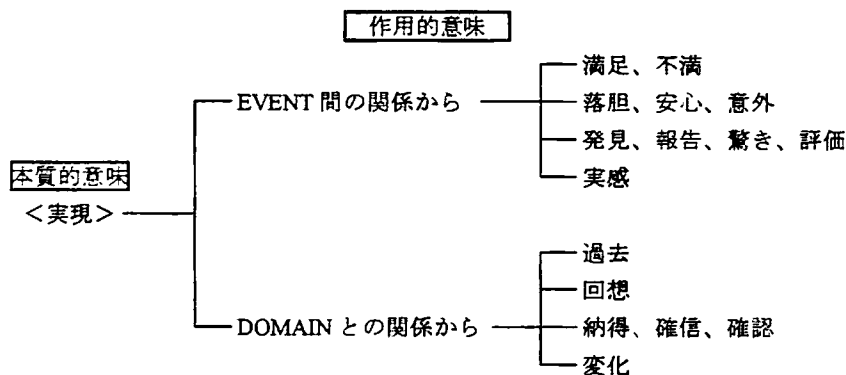
われわれが感覚として感じることは、われわれの非異常状況を前意識としたものであることは先に述べたとおりである。極端に背景化された前意識の意義は、プロフィールのいつその焦点化であるが、われわれは、プロフィールに極度な焦点化を感じるにより、E_i から E₁ へのプロセスと、その終点に位置するプロフィールという一連が思い起こす。例えば、「おなか空いた？」と「おなか空いてる？」を比較すれば、前意識の存在を感じるかどうかの違いは明らかになるだろう。

6. まとめ

テンス概念では説明できないことから、従来はさまざまに分類され、用法の列挙に留められていた「タ」の意味を、認知言語学のパラダイムで統一的に説明してみた。「タ」の意味構造は(図5)に示した通りであり、これは、《話者が EVENT をベースとプロフィールの関係として捉え、プロフィールを言語化した場合に「タ」が表出される》という話者の心的操作の図式である。

言語の意味構造を認知領域と際立ちの相互関係という、人間の最も基本的な認知態度に着目することにより抽出された＜実現＞の意味が「タ」の本質の意味であることを、本稿ではさまざまな文末の「タ」を採り上げて説明してきた。この＜実現＞が、文末のみならず、「帽子をかぶった人」「今度行った時に買って来てね」など、句、節のあらゆるレベルに適応するものであることは別稿で詳説するつもりでいる。

また、この本質の意味と同時に、もう一レベル表層でも意味を持つ。それを本稿では作用の意味と名づけた。以下に示すようである。



上図を見て、まず気付かされることは、作用の意味として掲げられているいくつかは、従来用法として列挙されていたものと同一であるということである。このことから考えられる

ことは、従来の用法の列挙も、列挙した人はその基準を自己の直観に据えていたのだろうが、言語を既にそこにあるものとして捉える、つまり、自己の直観を基準にしながらも、心的操作までが射程にないこれまでの研究パラダイムでは、その直観が何に依拠するものであるかまでの解明には至らなかったのではないかということである。

しかし、パラダイムを転換すれば、言語は認知主体の心的操作の表れである。そのため、その心的操作を解明すれば、言語の産出メカニズムが解明されることになる。従来の文法研究パラダイムでは意味機能を統一的に把握できなかった「タ」が、パラダイムを転換させれば、その本質を露わにしたのである。パラダイム転換の意義がここにある。

さて、問題となっている「過去」の意味であるが、上図は、「過去」が作用的意味の一つとして位置づけられている。従来では主たる意味であるとみなされていた「過去」が、主たる意味ではないということで列挙に留められていたさまざまな意味と同じレベルの意味であったというのである。これは非常に興味深い結果である。言語についての関心が、人と人とのコミュニケーションという現実世界の行為に集中し、言語行為が、現実の行動のみならず、あらゆる行動について語ることができるものであることを、われわれは忘れがちである。われわれ話者は、身体的に現実世界に位置し、現実世界のなかで音声や文字を用いて「タ」を表出する。この現況だけに目を向ければ、「タ」は現実世界だけについて述べているように見えるかもしれない。しかしながら、われわれは、身体は現実世界に立脚させながらも、実に複雑に自己の内部・外部世界と交渉しながら日々を生きているのであって、ことばはその交渉を反映する。記憶、思考、感覚世界において、そこに描き出される EVENT は、現実世界をわずかにずらした話者の内なる世界の EVENT である。(図5)に見られる(d₁)のさまざまなそういった相互作用の対象となる世界のたようさを示している。

このように考えれば、「タ」の表す「過去」の意味は、さまざまにある DOMAIN のなかで、E₁がたまたま現実世界を DOMAIN とした時に発揮される作用的意味であるということに納得がいくだろう。テンスとは、もともと、発話者の今、ココを基準時点とし、その時間的前後関係を示したものの、つまり、発話者の現実世界に流れる時のなかに位置づけられた EVENT の時間的位置であることから、現実世界に位置づけられた EVENT に過去を感じるのとは妥当である。また、この妥当性は、記憶、思考、感覚という非現実の DOMAIN に位置づけられた他の例には、われわれが過去を感じないということによっても証明されるものである。

以上から、従来では本質の意味とみなされることの多い「過去」が、実は、「過去」ではないということから列挙されていた他の用法と同じレベルに位置づけられるべきものであることが主張できる。

<注>

- 1.本稿5で定義。
- 2.本稿でのテンスは、いわゆる絶対的テンスのみを意味する。
- 3.無いと分かっているものを探することは日常世界ではあり得ない。あるとすれば、それはすでに詩的世界に入り込んでいと考えればいだろう。
- 4.言語の意味と効果はしばしば混同されて説明されるが、両者は別のものである。
- 5.ここでは、意識されているのだが、つねには意識されていないという 意味で、前意識という表現を用いる。

<例文出典>

- 赤川次郎『女社長に乾杯 (下)』新潮文庫 1996
 荻田芳久「幻の光」『シナリオ'96 1月号』シナリオ作家協会 1996
 倉本聰「町」「ドラマ」映人社 1996
 周防正行「Shall we ダンス?」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社 1996
 田中陽造「新 居酒屋ゆうれい」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社 1996
 中島哲也「夏時間の大人たち」『'96年鑑代表シナリオ集』1996
 布施博一「お日柄もよろしくご愁傷さま」『'96年鑑代表シナリオ集』映人社 1996

<参考文献>

- ハンス・ライベンハッフ (荻原明男・横家恭介 訳) 1986 『相対性理論の誕生』講談社学術文庫
 山梨正明 1995『認知文法論』ひつじ書房
 山本雅子 1996「テンスとモダリティのあいだ」『言語科学論集(2)』京都大学総合人間学部基礎科学
 科情報科学講座
 Bartlett, F.C. 1932. Remembering. Cambridge University Press
 Daniel C. Dennett. 1991. Consciousness Explained. Little Brown & Company
 Gilles Fauconnier. 1997. Mapping in Thought and Language. Cambridge University Press
 Paul M. Churchland. 1995. The Engine of Reason, the Seat of the Soul: A Philosophical Journey into
 the Brain. The MIT Press
 Robert C. Shank 1982. Dynamic Memory. Cambridge University Press
 Ronald W. Langacker. 1987. Foundations of Cognitive Grammar I. Stanford University Press